

姫路市医師会

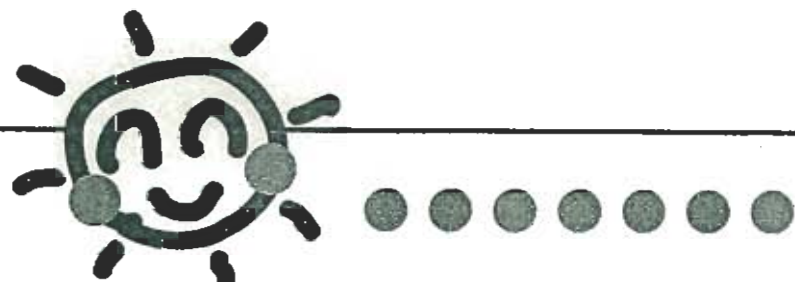
ほうもん かんご

訪問看護ステーションだより

居宅介護支援事業所

姫路市医師会訪問看護ステーション 姫路市西今宿3-7-21 TEL0792-95-3377

No.016 2005.7発行



夜空に「夏の三大角」が一晩中見えるようになりました。

こと座のベガ、はくちょう座のデネブ、わし座のアルタイルです。ベガは七夕の織姫星、アルタイルは彦星です。天の川を挟んで光っています。あの星の光は私達の目に届くまで何百年もかかって宇宙空間を旅してくるのだそうです。そうだとすれば、私たちは何百年前の過去を見ていると言うことでしょうか？

今回は在宅でのターミナルについて考えてみました。



●● 特集 ●● 在宅ターミナルを考える ●●●●

● 姫路市医師会訪問看護ステーションでのターミナルへの取り組み

- ・主治医の指示により点滴をはじめました（条件つき）
- ・24時間連絡体制をとりました
- ・定期的なナース研修会にて症例検討等の勉強会を行っています

● 在宅でのターミナルを可能にする為には

- ① ご本人、家族が在宅での看取りを希望している。
- ② 介護できる家族がいる。
- ③ 往診してくれる主治医がいる。
- ④ 痛みのコントロールができる。
- ⑤ 療養できるスペースがある。



在宅医療の充実を
主 婦 本山 翠子 32
(千葉県栄町)
在宅医療を支える訪問看護師の記事(5月10日掲載)を読み、5年前、病院で亡くなった祖母のことを思い出しました。倒れて入院した時は、がんも末期状態でしたが、一度だけ退院して自宅に帰ることができました。その時の祖母の喜びは、今でも忘れられません。家で最期を迎えることができたらどんなによかったですか。また、私の子供は、出産時に脳に障害を受けて入院中です。退院できたら、県内の小児科の先生と看護師さんが往診してくれることになっていきます。こうした人たちの活動が広がることを願います。

読売新聞投稿より

声

F氏の事例 (姫路市医師会訪問看護ステーションでの最近のケース)

しゃくしゃくの花が咲き始めた4月の末、F氏は総合病院より在宅へ戻って来られました。ご自分の病気を充分理解した上で最後のひと時を自分の家で過ごす為です。その時は又、病院へ戻る事も考えておられたようです。奥様とお二人の暮らしでしたが、在宅療養するにあたり息子さん家族、娘さん家族が交代で泊まりの介護にあたられました。

ベッドのある部屋には庭に咲いたしゃくしゃくの花が飾られ、隣のリビングから子どもさんや孫さんの笑い声が静かに聞こえてきます。

在宅での主治医の先生が往診に来られるのを楽しみに待たれています。食事が摂れないとの理由でご家族の希望で訪問看護により一日一本の点滴が開始となりました。

治療の目的でない事はもちろん皆、承知していましたが、それによりご本人、ご家族は安心されました。その点滴が終わるまで訪問看護師は側について、いろいろな話を聴かせていただきました。趣味の俳句の話は、笑顔を見せ思い出とともに楽しそうに話されます。

膨満したお腹と全身黄疸の為の搔痒感、身のおきどころのない倦怠感も口にださず、ただ足を摩ったり、腰に手を当てる事しかできない看護師に「病院の特等室にいるより手厚い看護を受けた」とおっしゃって下さいました。

いよいよ病状も深刻になった連休前、主治医の先生はベッドサイドでご本人にしっかりと説明されます。「いよいよ厳しい状況です。入院を希望されるのであれば手配しますが、どうされますか」「このまま家がいいです。お願いします」静かな表情でしっかり答えられました。別室に家族を呼び、「もう、点滴はしません。痛い目にあわせることはないでしょう。皆さんで見守ってあげて下さい」そう、先生は説明されました。

医療者として責任をもって見守るという事は、たくさんの医療を施す事より難しい事かもしれない。人の死が、自然であたりまえの事ではなくなりつつある今、5月の風のように心の中を通りぬけていったケースでした。

終末期医療 自宅での最後に救いを求め 山本 高史先生

終末期医療に関する厚生省の最新の意識調査では一般人の4人に1人が自宅での死を望みながらその9割が死の間際には医療機関を利用したいという。人々は医療に不信を抱きつつも、医療抜きの死にはなほ強い、不安があるようだ。遠く医療のない時代、お年寄りの死とは、冬が近づけば、木の葉の散るようによく自然なものだったに違いない。皮肉な現象だが、人は豊かさにつれ、医療の進歩につれて、死がますます過酷で、悲惨なものになっていくように感じる。医療では、死を待ちながらも様々な延命治療が続き、病人は風に逆らうようにして死んでいるのが実情だ。自宅での最後とは、あらゆる延命に見切りをつけることであり、死に唯一救いを求めることでもある(中略)

こうした壁の上で迎える最期に接すると、私自身、人は病院で死ぬものだという常識にひびの入った気もする。堅い白壁の病院より、家族の声と思い出の詰まった我が家のほうが、どれだけ心を慰めてくれるかもしれない。医療を離れば、人は本来の死を取り戻す。病院からホスピスへ、ホスピスから自宅へ……気がつけば私たちは自然に生き、自然に死んでいくことに、最良の選択を見出し得るのかもしれない。(5月20日読売新聞 論点より抜粋)

ナンシーウツド著
ネイチャーアメリカンの言葉

今日は死ぬのにもってこいの日だ
生きていたものすべてが、私と呼吸を合わせている。
すべての美が、わたしの中で合奏している。
あらゆる悪い考えは、私の中で休もうとしてやって来た。
今日は死ぬのにもってこいの日だ。
私の土地は、私を静かに取り巻いている。
私の畑は、もう耕されることはない。
私の家は、笑い声に満ちている。
子ども達は、うちに帰ってきた。
そう、今日は死ぬのにもってこいの日だ